

《山崎 直子》氏

「宇宙、ひと、いのちをつなぐ」

宇宙飛行士になるまで

私は幼少期に北海道で過ごした時期があって、そのときに見上げた星空がきれいだったので、自然に宇宙、星に興味を持つようになりました。当時は「宇宙戦艦ヤマト」とか「銀河鉄道999」「スター・ウォーズ」等が流行っていた時期でしたので、「大人になったらみんな宇宙に出かけて宇宙に住む」そんな時代が来ると子供心に思っていました。

1984年に国際宇宙ステーションのプロジェクトが始まり、日本も参加するという決断がされ、いずれは日本人が本当に宇宙に行く時代が来ると思いました。その後皆さんもご存じの毛利さん、向井さん、土井さんが宇宙飛行士に選抜されたのは、私が中学生のときでした。

私が宇宙飛行士を目指す契機は、1986年1月に起こったスペースシャトル「チャレンジャー」号の爆発事故です。大変な事故ではありましたが、事故を通じて「頑張っている人たちがたくさんいる」ということが逆に現実として伝わってきました。「まず宇宙開発そのものに携り、その中で機会があれば自分自身も宇宙に行きたい」と、私が思うようになった大きな出来事でした。

1度目の試験は不合格となりましたが、その後、エンジニアとしてJAXAで仕事をすることができ、数年後の2度目の挑戦で宇宙飛行士試験に合格しました。

宇宙飛行士の訓練

宇宙飛行士になることがゴールではありません。1999年から2010年まで11年もの間、訓練の日々でした。訓練内容を少し紹介しますと、学校で習う理科実験、人工呼吸、心臓マッサージ、切り傷を針と糸で縫合する練習、抜歯の練習もします。もちろん座学もあれば、試験もあります。それから、無重力空間に見立てたプールの中での船外活動の練習、また、飛行機の操縦訓練も行いました。

こうした訓練を開始していた、3年目か4年目に、再びスペースシャトル「コロンビア」号が事故を起こしました。一時期スペースシャトルが飛行できない不安な時期もありましたが、訓練を重ね、その後スペースシャトルの飛行再開後の第1便に土井さんが選ばれました。我々は毎日訓練だけをしているわけではなく、訓練30%に対し、残り70%はサポート業務です。私も土井さんが宇宙に行っている間は、地上でサポート業務をしていました。土井さんが無事に宇宙に到達したとき、日本の国旗とともに日本人宇宙飛行士の集合写真、その下に私の写真を貼ってくれました。土井さん自身も宇宙に行く前は他の人のバックアップを長年務めており、サポートの大切さや葛藤などを知っていたので、こうして写真を貼ることで「頑張れ、次は山崎さんが宇宙に行くんだ」とメッセージを伝えてくれたのかなと思います。

宇宙を経験して

私自身も11年後の2010年4月「ディスカバリー」号で宇宙に行くことが決まりました。打ち上げ当日の夜明け前に、宇宙服を着て乗り込みます。待つこと3時間、いよいよ打ち上げのときです。エンジン点火をする瞬間、ものすごい振動と、轟音が周囲何キロにも響きます。8分30秒後にはアツという間に宇宙に到達します。それから国際宇宙ステーションに乗り移り、ロボットアームを動かす、運んだ補給モジュール

ルを取りつけました。

15日間の作業の後、地球に戻ってくると、今まで「無重力」状態だったのが「重力」を感じるようになります。「無重力」に慣れた体にとってはこの「重力」というものがすごく重たく、紙1枚でも重いと感じます。宇宙に行くと、皆さん「無重力」にはすぐに慣れますが、地球に戻ってきた後、地球の「重力」に再適応する方がより長い時間がかかるというのは少し不思議な気がします。

地球に着陸し初めて外に降り立ったとき、フワッと風を体感じ草や木や緑の香りが漂ってきます。それらを体感じ嗅いだとき、「ああ、地球ってすごくいいな」と思いました。宇宙から見る地球ももちろん美しいですが、この日常のごくごく普通の景色が一番美しい、ありがたいと思います。こうして空気が吸え、風が吹き、水が飲め、土の感触がある。そうした一つひとつが当たり前とってしまっていますが、宇宙船のように限られた人工的な空間から見ると、やはりすごく貴重だと、感謝しなければいけないと感じさせてもらいました。

2025年に大阪に誘致をしている万博、私も誘致の特使をしていますが、そのテーマも「いのち輝く未来のデザイン」、即ち、地球の中で私たち一人ひとりのいのちがきちんと続いていくような社会をつくっていかう、と訴えているように、いま、地球全体で持続可能な社会にすることがとても大切になってきていると思います。たくさんの人に支えられながら私たちが行っている宇宙開発の役割として、そういった社会づくりに対し、宇宙から写真やデータを採る、無重力を生かす、それに付随した様々な技術に波及させていくという3つの役割があると思っています。様々なものと連携させながら、例えば、GPSの精度を高めて海面の動きをキャッチし津波等の警報をより早く出して多くの命を救うことや、農産物の品質や収穫の向上に役立てること等といった取り組みが行われています。

私自身も宇宙教育に力を入れることができたということ、日本宇宙少年団のアドバイザーを務めたり、立命館大学のスポーツ健康科学部と一緒に活動したり、宇宙と他の分野を結び付けるネットワークづくりに努めているところです。まだまだ宇宙はわからないことだらけです。わからないということは時に不安になりますが、好奇心を生み出すものでもあると思っています。

「Wonderful」これは、「wonder（わからない、未知）」なことが「full（たくさんある）」ということで、素晴らしいという意味になっています。私たちの人生も一緒に、将来のことはわかりませんし、予測ができません。だから、今でも、時に不安になったり、悩んだりします。でも、最初から決まっている道があるわけではなく、これから自分が「どう感じ」、「どう動き」、「どう人と出会っていくか」によって、新しい道が広がり、新しい可能性が生まれます。私はそれが「いのち」であり、そうした「いのち」があるということが素晴らしいと思うようにしています。だから、悩んだときにはちょっと思い出し元気をもらっている言葉です。

皆さんもぜひこの「いのち」、そして広い宇宙の中でのこの「地球」のことを考えていただき、時々、空を見上げていただけたらうれしいなと思います。